

東北楽天ゴールデンイーグルス 岸 孝之さんに聞く

聞き手 外川智恵さん ● 大正大学表現学部准教授



きし・たかゆき

84生まれ、仙台出身。プロ野球の東北楽天ゴールデンイーグルスに所属。投手、右投右打。'06東北学院大学を卒業後、西武ライオンズ（現・埼玉西武ライオンズ）に入団。'14最高勝率のタイトルを獲得。'17東北楽天ゴールデンイーグルスに移籍。

ピンチのときは、マウンドでもファンの声援がよく聞こえる

外川 本日は、プロ野球の東北楽天ゴールデンイーグルスで投手として活躍なさっている岸孝之さんにお話を伺います。

岸さんは仙台市出身で、東北学院大学をご卒業後、2007年に西武ライオンズ（現・埼玉西武ライオンズ）に入団。その年に優秀新人賞を獲得し、翌2008年には日本シリーズ最高殊勲選手賞、2014年に勝率第1位になるなど、輝かしい成績を収め、2017年から東北楽天ゴールデンイーグルスでプレーなさっています。

岸さん、2017年のシーズンを振り返って、ご自身のプレーをどのように分析されますか。

岸 そうですね、シーズンの前半は良くて後半は良くないという、はっきり分かれた年だったと思います。私が投げた試合は、自分が勝ち投手になるかどうかにかかわら

ず、チームが勝つことが多かったのですが、後半になると、私が勝ち投手にならないとチームが負けるという状態でした。チームの勝利にあまり貢献できず、残念です。

外川 投手の責任といいますが、背負っているものとはとても重いのだろうと想像しながら、いつも試合を拝見しています。

岸 先発ピッチャーは試合を任されている立場なので、勝たなければいけないという思いが非常に強いため、後半戦はずっと悔しくてつらかったですね。

外川 本日はファン感謝祭で、つい先ほどまで多くのファンの皆さんに囲まれていらっしやいましたね。ファンの皆さん、とても嬉しそうでした。

岸 この1年間、チームの状態はいいときも悪いときもありましたが、いつも変わらずに大きな声援をいただきました。それに対する感謝の気持ちを込めて、皆さんに楽しんでいただきたいと思います。本当に大勢のファンの方が、このKoboball

ク宮城に来てくださって、うれしかったですね。

外川 そういったファンの声援は、試合中のマウンドでも聞こえるのでしょうか。

岸 ええ、聞こえます。特に、ピンチのときなどはよく聞こえてきて、力をもらうことも結構あります。それによってバッターを抑えられればいいのですが、そういうことばかりではありません。声援に比べられ



なかったときは、申し訳ないですね。

外川 次のシーズンは、どのような気持ちで臨もうとお考えですか。

岸 やはり、先発ピッチャーは勝ち星をあげることに、自分の勝ち星イコールチームの勝利という形で貢献すべきだと思います。そこにこだわって、1年を通してしっかりと試合に出れば、結果はついてくると信じて、春の開幕に向けて調整していくつもりです。

自分には野球しかない、野球をやっていたら普通の人間

外川 東北楽天ゴールデンイーグルスに移籍なさって、1年たちました。新たな場所です、しかもご自分の出身地です。この1年は大きな意味がありそうですね。

岸 プレーする環境が変わったということが一番大きく、その中で自分がどこまでやれるか不安もありました。しかし、チームメイトを含め球団関係者の皆さんのおかげ



岸孝之さん

で、1年間無事にプレーすることができ、自分も少しは成長したのではないかと思えます。

外川 スポーツ選手にとって、環境が変わることは、プレーそのものが変わることとも言えそうです。良い方向への変化でしたか。

岸 それまで慣れ親しんだチームメイトと離れて、新しい仲間とプレーするわけですから、はじめは互いに探りながらという面もありました。しかし、野球そのものは同じなので、すんなり溶け込めたと思います。
外川 ところで、野球を始めたきっかけは、

社会人野球の監督でいらつしやったお父さんの影響だそうですね。

岸 それが一番大きかったと思います。少年野球のチームに入ったのは小学校3、4年生の頃でしたが、それ以前から柔らかいボールで野球のまねごとをして遊んでいました。私の中では、父はいまでも一番のコーチであり、野球に関することで悩んだら連絡して、アドバイスをもらったりしています。やはり、私を一番長く見てきたのは父です。

外川 プロ野球の選手になることを意識するようになったのは、いつ頃ですか。

岸 大学の4年生のときに、ドラフトで指名していただくと聞いてからです。ただ、自分には野球しかない、野球をやっていないかったら普通の人間もいいところだとは思っていました。野球以外には取りえのない人間であり、野球に出会ったおかげで、いまこうしてプロとしてプレーさせていただいているわけです。

試合前のプレッシャーはあるがままに受け入れる

外川 野球のトップレベルの選手にお話を伺うと、いつも思うのですが、大きな期待を寄せられているにもかかわらず、非常に落ち着いていらつしやいます。岸さんにも同様に風格やゆとりを感じます。

岸 試合の前はとてもプレッシャーを感じますが、プレッシャーをなんとかしようと考えたことはありません。あるがままに受け入れます。

外川 なるほど。「老子」の名言のとおりですね。では、学生時代のお話を聞かせてくだ



さい。岸さんは、東北学院大学野球部のエースでしたね。高校の野球部から大学の野球部に入られて、何か違いを感じましたか。

岸 大学1年生の自分からすると、4年生はとても大人に見えました。二十歳以上の人と野球をするというだけで、ものすごく緊張したのを覚えています。

外川 レギュラーとして活躍されたことを考えると、よい緊張だったのでしょうかね。

岸 自分のほうから何かするというよりも、プロになってからもそうですが、私はキャッチャーに引っ張ってもらって成長するタイプなので、そういう相手の存在が非常に大きかったと思います。

外川 それは、裏を返すと「引っ張られ上手」もしくは「教えられ上手」ということでしょうか。

岸 そうですね(笑)。私はキャッチャーを非常に信頼しています。

外川 岸さんにとって、信頼できる方はどのようなタイプですか。

岸 振り返ってみると、頭の回転が速い方が多かったですね。決断力というか、何かを決めるときに速さや正確さが抜きん出ていたように思います。そうでないと、あまり上には行けないということなのでしょう。

外川 岸さんご自身も、新人賞をはじめ、いくつも受賞されるなど抜きん出ていらっしゃいますよね。

岸 やるからには、一番になりたいですしね。誰もが一番を目指して一生懸命やっているの、それが評価されるのは素直にうれしい。プロになってそういう賞をいただいたのは、運が良かった面もあると思いますが。私は小さい頃からいままで、ずっと負けず嫌いだっただからだと思います。

外川 ストイックなんですね。
岸 2017年の後半は、ずっと悔しかったです。

**私のもっと上に誰かがいるから
その人に近付こうと努力する**

外川 岸さんが力を発揮できるのは、どういう環境にいらつしやるのでしょうか。

岸 先ほどの話に関連しますが、一番を指して頑張っているけれども、私のもっと上に誰かがいるから、その人に少しでも近付けるよう努力することによって自分が成長する、そういうことができる環境じゃないかと思います。

外川 目標を持つのですね。ところで、西武時代と同じ背番号11番を付けていらっしゃいますが、「11」にジンスクスがおありなのですか。

岸 そんなことはありません。むしろ、2



外川 智恵さん



016年まで11番を付けていた塩見に申し訳なくて。私は他の番号でもよかったのですが、塩見から「岸さんだったら」というお話があったので、使わせていただいています。番号とかジンスクスのようなものは、あまり意識しないほうですね。

父から「桑田さんを見る」と言われ、ずっと手本にしてきた

外川 ファン感謝祭に来ていた野球少年たちは、憧れの岸さんに会えてうれしかったでしょうね。岸さんにも憧れた選手がいるのでしょうか。

岸 桑田真澄さんです。憧れたというより、いつも父から「桑田さんを見る」と言われ続けたので、小学生の頃からずっと桑田さんを手本にしていました。

プロ野球に入ってから、キャンプ中に一度だけ桑田さんご本人にお会いしたことがありますでしたが、緊張してほとんど話ができませんでした(笑)。

外川 憧れていると、そうなりますよね(笑)。私は、西武ライオンズの選手時代の渡辺久信さんでした。

岸 渡辺監督は試合になると熱いし、すごくカッコいい方です。私が打ち込まれたときなどは、翌日、そっと近づいてきて声をかけてくださったたり、いろいろとアドバイスをしていたことがあります。

外川 毎回、真剣勝負に臨まれて、さまざま

まな教訓を得られると思います。その都度、新鮮な気持ちでマウンドに立たれるのですか。

岸 たぶん、忘れてはいけないのだと思います。状況を細部まで覚えていて、次に同じバッターと対戦するときにはこうしようといったように、頭の中にあるいろいろな記憶や戦略がないといけないと思います。

外川 物事のすべてを受け入れる懐の深さを教えていただきました。ありがとうございます。



岸孝之さんと外川智恵さん
(2017年11月23日 Koboパーク宮城にて)